東北大学機関リポジトリ
TOUR
Tohoku University Repository

ルーマニアにおけるドイツ語学文学研究の現在を読む ―ルーマニア独文学会会長ジョルジュ・グッ教授の古稀記念 論集刊行に寄せて―

著者	藤田 恭子
雑誌名	東北ドイツ文学研究
巻	57
ページ	123-130
発行年	2016-10-15
URL	http://hdl.handle.net/10097/00127147

ルーマニアにおけるドイツ語学文学研究の現在を読む

――ルーマニア独文学会会長ジョルジュ・グツ教授の古稀記念論集刊行に寄せて――

藤田　恭子

1989 年 12 月のチェウシェスク政権崩壊とともに，ルーマニアのドイツ語学文学研究は決定的転換を迎えた。同国内のドイツ語学文学研究を支えていたドイツ系マイノリティ出身の研究者たちが大挙して（西）ドイツへと出国する一方[1]，それまで国家によって禁止されていた学術団体の結成と活動が可能となり，ルーマニア系の研究者を中心に，（西）ドイツやオーストリア等西側ドイツ語圏諸国からの支援をも得て，より自由で積極的な研究活動が展開されるようになったのである。その核となったのが，1990 年 3 月に設立された Gesellschaft der Germanisten Rumäniens であり，1992 年に創刊された同学会誌 „*Zeitschrift der Germanisten Rumäniens*“（以下，*ZGR*）である。学会設立と学会誌刊行を牽引したのが，当時ブカレスト大学外国語学部講師であり，1993 年より同学部教授となったジョルジュ・グツ氏（Prof. Dr. George Guțu）だった[2]。

ルーマニアでは，1932 年に Gesellschaft der Rumänischen Germanisten が創設され，学

---

1) 体制転換後の5年間にルーマニアからの帰還移住者(Aussiedler)としてドイツ連邦共和国に登録された者は 171,914 名にのぼり，そのうちの 111,150 名は 1990 年に登録されている。Vgl. Bundesministerium des Innern (Hrsg.): *Migrationsbericht des Bundesamtes für Migration und Flüchtlinge im Autrag der Bundesregierung (Migrationsbericht 2011)*, Nürmberg (Bundesamt für Migration und Flüchtlinge) 2013, S. 52. ドイツ系マイノリティの出国がルーマニアのドイツ語文化やドイツ語文学に関連する各方面に与えた影響については，拙論「コミュニティの破綻とマイノリティ文化の再編――東欧革命後のルーマニア・ドイツ語文学――」，奈倉洋子編『ドイツ語圏文化の現在――ベルリンの壁崩壊・東欧革命後 20 年の変化を読む――』（日本独文学会叢書 080），日本独文学会，2011 年，4-18 頁，特に 9-10 頁を参照。

2) ルーマニア独文学会の設立経緯と活動については，以下の拙文を参照されたい。Kyoko Fujita: Die Gesellschaft der Germanisten Rumäniens (GGR) und ihre Tätigkeiten. Die Geschichte und die Gegenwart der Germanistik in Rumänien. In: Japanischen Gesellschaft für Germanistik (Hrsg.): *Neue Beiträge zur Germanistik Bd.2. H.3*, München (iudicium Verlag) 2003, S. 218-222.

会誌も刊行されていたが，1940 年代初頭に，「イデオロギー上の諸対立および戦争の混乱」[3]によって活動を停止していた。第二次世界大戦後は社会主義体制下で学術活動を制限されており，学会の再建と学会誌の復刊は，ルーマニアのドイツ語学文学研究者の悲願でもあり，その悲願がクリスマス革命とともに実現する運びとなったのである。

それから四半世紀を経て，2014 年 12 月，グツ教授の古稀を祝う記念論集がルーマニアとドイツにおいて全 2 巻で刊行された。Gabriel H. Decuble / Orlando Grossegesse / Maria Irod / Stefan Sienerth (Hrsg.): *„Kultivierte Menschen haben Beruhigendes ...“Festschrift für Goerge Guțu. 2Bde.*, București (Editura Universității din București) / București (Editura Paideia) / Ludwigsburg (Verlag Pop) 2014[4]である。

本書には 38 編の論文が，グツ教授に捧げられた小文 7 編や学術および文化交流関係の各種の賞を受賞した際のグツ教授の答礼スピーチ 5 編，4 名の編者がそれぞれドイツ語とルーマニア語でしたためた祝辞，教授の研究業績一覧その他とともに，収められている。この 38 編の論文は，教授が半生を捧げてきたルーマニアのドイツ語学文学研究の現在をも映し出す鏡となっている。本稿では，このような視点から，グツ教授の記念論集について紹介し，またルーマニアのドイツ語学文学研究の現状の一端をも伝えたい。

*

38 編の論文の著者は，ルーマニアやドイツ，オーストリアのみならず，オランダ，ハンガリー，イタリア，ニュージーランド，韓国，日本からも集まっており，ルーマニアのドイツ語学文学研究者がドイツ語圏諸国の研究者と密接に連携する一方で，Auslandsgermanistik 全体の連携をも図るべく，グローバルな対外交流を行っている様子を見てとることができる。これらの論文は，グツ教授自身の研究テーマに照応する形で，大きく 4 つの章に分けられ，掲載されている。

グツ教授が最も重点を置いている研究テーマは，パウル・ツェラン（Paul Celan），そして彼の出身地（旧）ルーマニア領ブコヴィナ（Bukowina）のドイツ語文学である[5]。教授は 1977 年に旧ドイツ民主共和国のライプツィヒ大学で論文 „Die rumänische Koordinate der Lyrik Paul Celans“[6]により博士号を取得し，ツェラン研究とブコヴィナの

3) George Guțu: Zum Geleit. In: *ZGR Jg.1. H.1*, 1992, S. 7.

4) 以下，同論集所収の論文については，題名の後に，巻数と頁数のみを示す。

5) ブコヴィナは第一次世界大戦後にルーマニア領となるが，第二次世界大戦後は南北に分断された。ツェランの故郷の町チェルノヴィッツは北部にあり，現在はウクライナ領である。

6) George Guțu: *Die rumänische Koordinate der Lyrik Paul Celans*, Dissertation zur Promotion A. Universität

ドイツ語文学研究をライフワークとしてきた。また教授は，ブコヴィナに加えてジーベンビュルゲン（Siebenbürgen，トランシルヴァニアのドイツ名）やバナート（Banat）地方，首都ブカレスト等も含めたルーマニア諸地域のドイツ語文学研究にも積極的に取り組んでいるが，これらは，ルーマニア独文学会が特に重視している研究テーマでもある[7]。なおルーマニアのドイツ系マイノリティは同国の地理的位置を示す際に，好んで「南東ヨーロッパ（Südosteuropa）」という語を用い，ルーマニアのドイツ語文化やドイツ系の民族を示す際には，しばしば「南東ドイツの（südostdeutsch）」という形容詞が用いられる[8]。ツェランとブコヴィナ，そして南東ヨーロッパの諸ドイツ語文学，この二つの研究テーマにはそれぞれ9編と15編の論文が寄せられ，前者は „Paul Celan und sein bukowinisches Umfeld“，後者は „Ästhetik und Minderheitenraum –Aspekte der süd- und südostdeutschen Literaturen“ の表題のもとに整理されて，記念論集の第1巻を成している。

またグツ教授は1998年にGoethe Gesellschaft in Rumänienが設立された際も主導的役割を果たし，初代会長を務めるなど，ゲーテ研究にも造詣が深い。2009年刊行の「東北ドイツ文学研究」第52号に寄稿された教授の論文では，1904年から1905年にかけてブコヴィナ，ガリツィア，ブルガリアで生を享けた3名のユダヤ系作家，すなわちモーゼス・ローゼンクランツ（Moses Rosenkranz），マネス・シュベルバー（Manès Sperber），エリアス・カネッティ（Elias Canetti）の自伝がどれほどゲーテの自伝『詩と真実（Dichtung und Wahrheit）』の影響下にあるかを実証している[9]が，このテーマ設定は，ゲーテ自身

Leipzig, 1977(maschinenschriftlich).

7) 1990年に設立されたルーマニア独文学会が最初に取り組んだ催しはパウル・ツェラン・シンポジウムである。1990年11月29日に開催された同シンポジウムには，ルーマニアのドイツ語学文学研究者に加えて，ドイツ語新聞編集者やツェランと親しい友人であったペートレ・ソロモン(Petre Solomon)も報告を行い，ルーマニア独自のアプローチが試みられている。詳細については，以下のシンポジウム報告に掲載されたパネリストの報告を参照されたい。Paul-Celan-Symposion in Bukarest (November 1990). In: *ZGR Jg.1. H.1*, 1992, S. 20-54.また以後も，学会誌や研究発表会等，様々な機会で，ルーマニアのドイツ語文学やドイツ語文化に対する積極的な取り組みを見ることができる。詳細は注2に挙げた拙稿を参照。

8) 詳細は，鈴木道男「帰還『南東ドイツ』人意識の変遷（1）――『南東ドイツ四季報』に拠る人々と詩――」，『グローバル化によるディアスポラ文学の変容――ディアスポラ・アイデンティティの再編――』（平成19年度～平成20年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究成果報告書）（研究代表者：鈴木道男）2009年，42-67頁，特に42-46頁参照。

9) George Guţu「Deutschsprachige autobiografiesche Aufzeichnungen in Süd-Ost-Europa. Am Rande des späten Erfolgs des Bukowiner Dichters Moses Rosenkranz」，東北ドイツ文学会『東北ドイツ文学研究』

に関する幅広くかつ深い知識に裏付けられている。同時に，2009 年の論文に見られるように，グツ教授の研究における問題設定は複数の境界を超えるものでもあり，ドイツ語文学や文化を扱いつつ，文化のハイブリッド性に対する鋭敏な意識に貫かれている。ゲーテと彼に続く時代，そして文化のハイブリッド性が論集の第 2 巻を成すテーマである。この巻には，„Kontextualisierung und Analyse – Zur Literatur der Goethezeit des ausgehenden 19. und 20. Jahrhunderts“として 4 編，„Kontrapunktik von Identität und Hybridität“として 10 編の論文が収められている。

*

38 編の論文からは，近年のルーマニアにおけるドイツ語学文学研究，さらにルーマニア・ドイツ語文壇に見られるいくつかの傾向を読み取ることができる。

ツェランやブコヴィナを扱う章の冒頭には，ルーマニア出身のドイツ語作家ディーター・シュレーザク（Dieter Schlesak）による論考 „Beitrag von George Guţu zur Celanforschung“（Bd. 1, S. 75-84）が収められている。論題から，グツ教授の学術的功績を称える内容であることが推測され，実際にその面が強いが，多くの場合 Binnengermanistik の視点から語られるツェラン研究史に新たな光を照射する，刺戟的な論考である。この論考では，東西冷戦構造の時代，ルーマニアでの研究成果が Binnengermanistik のツェラン研究に反映され正当に評価されることがいかに難しかったか，また冷戦構造が終結した後もなお，詩人を育んだ故郷のドイツ語文化，さらにはそれに対するルーマニア語文学やルーマニア語文化の影響について，十全に評価が定着しているとはいえない状況が提示されている。なおツェランに関しては，平野嘉彦氏の論文 „Lektüre einer Naturgeschichte. Zu Celans Gedicht ‚Todtnauberg‘“（Bd.1, S. 84-100）をはじめ，3 編の興味深い論文が収められている。

本稿の筆者はブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人について研究しているが，ルーマニアの研究者により，新しい資料の発掘が目覚ましく進んでいることに改めて気づかされた。なかでも注目したのはブカレスト大学講師のラドゥレスク博士（Dr. Raluca Rădulescu）による論文 „Zum Antisemitismus der Zwischenkriegszeit am Beispiel der ‚*Bukowiner Volkszeitung*‘ (1929-1938)“（Bd.1, S. 151-162）である。戦間期ブコヴィナのユダヤ系新聞の記事を分析し，ルーマニア化政策の下で，反ユダヤ主義の伸張がどのように報じられていたのかを明らかにすることで，これまで「多民族の平和的共生のオアシス」[10]として喧伝されることの多かったブコヴィナ像を相対化する試みがルーマニ

第 52 号，2009 年，137-161 頁。

10) Amy Colin, Vorwort. In: Amy Colin / Alfred Kittner (Hrsg.): *Versunkene Dichtung der Bukowina. Eine*

アの研究者によりなされている。体制転換から四半世紀を経て，ルーマニアの学術研究が，イデオロギーや，政治性を帯びた歴史観から着実に距離をとりつつあることを実感した。

南東ヨーロッパ，すなわちルーマニアのドイツ語文学に関わる研究では，H.シュティーラー（Heinrich Stiehler）やS.ジーネルト（Stefan Sienerth）など，錚々たる研究者が連なっている。10編の論文の著者の多くが，長年，この分野での貴重な成果を生み出してきたベテラン研究者であり，それゆえにまた，研究者と研究対象となる作家や詩人との距離の近さも際立つ。10編の論文のうち，2編はヨアヒム・ヴィトシュトック（Joachim Wittstock）に関するものだが，ヴィトシュトック自身もアンドレアス・ビルクナー（Andreas Birkner）に関する論文を寄せている。グツ教授のツェラン研究に対する寄与について論考を執筆した作家シュレーザクに関わる論文も2編収められている。他方で，ノーベル賞作家ヘルタ・ミュラー（Herta Müller）や，ミュラーと密接な交流があり戦後生まれの世代に多大な影響を与えた「アクショングループ・バナート（Aktionsgruppe Banat）」に関する論文はそれぞれ1編ずつである。ヴィトシュトック家は四代にわたってジーベンビュルゲンのドイツ語文壇で主導的役割を果たしてきた一族であり[11]，ヨアヒムは現在もなお，ジーベンビュルゲンのドイツ語文学者にして文化人として活発に活動しているが，文学的には一般に，ミュラー，そしてアクショングループ・バナートに対する評価が際立って高く，文学的評価と論集の構成とが必ずしも一致してはいない。またミュラーに対するやや距離を取った編集の姿勢には，ミュラーがチャウシェスク体制下のルーマニアを厳しく批判し，ドイツ系住民も含めて，当時のルーマニア社会の成員が，秘密警察による監視と密告のシステムに迎合しシステムを支えたことを指弾し続けていることへの複雑な感情も与っているかもしれない。研究と文壇との関係が密接であり，また作家とルーマニア社会との関係に政治性も関わるなかで，世代によっては，学術研究上の中立的立場を確保することが難しい事情を見て取ることもできる。

特に後者の問題に関しては2006年12月29日にトラヤン・バセスク（Traian Băsescu）大統領が，社会主義独裁体制下での秘密警察にあたる「国家保安局（Departamentul Securității Statului）」，通称「セクリタテア（Securitatea）」の全文書を「セクリタテア記録文書研究国民評議会（Consiliul Național pentru Studierea Arhivelor Securității）」（以下，

Anthologie deutschsprachiger Lyrik, München; Wilhelm Fink 1994, S. 9

11) Vgl. Stefan Sienerth: Generationsspezifische Sichtweisen. Das siebenbürgisch-sächsische Dorf im Werk einer Schriftstellerdynastie: Oskar, Erwin und Joachim Wittstock. (Bd. 1, S. 209-230.)

CNSAS）に引き渡す旨を決定し，申請のあった当事者が閲覧する可能性を得たことで，事態はより深刻な様相を帯びることになった。数多くのドイツ語詩人や編集者，研究者たちがセクリタテアの協力者であったことが，被害者である，やはり数多くのドイツ語詩人や編集者，研究者たちにより指摘され公表されはじめたのである。もとよりセクリタテアの過去との対決はルーマニア全体の問題であり，ドイツ語話者に限ったものではない。しかし東ドイツ時代のシュタージの過去との対決という先例をも踏まえ，セクリタテアの過去をめぐる非難の応酬は新聞や雑誌といったメディアで猖獗を極めた。ミュラーに協力し，小説『息のぶらんこ（Atemschaukel）』（2009 年刊行）のために自らの収容所体験を資料として提供した詩人オスカー・パスティオール（Oskar Pastior）も，さらには前出のシュレーザクも，セクリタテアの協力者であったと新聞紙面で公然と非難された[12)]。

この問題で特に激しい論争を引き起こしたのは，作家エギナルト・シュラットナー（Eginald Schlattner）が 2000 年に発表した小説『赤い手袋（Rote Handschuhe）』である。セクリタテアの聴取を受けて拘束され，友人を裏切ってしまう主人公が登場するが，読者にとって衝撃的であったのは，登場人物のプロフィールや出来事が，1959 年にブラショフで，ハンス・ベルゲル（Hans Bergel）等 5 名の作家が逮捕され，裁判で有罪となり長期の強制労働を科せられた実際の事件を指し示していたことである。シュラットナーは実際に当該裁判に出廷し，起訴内容を裏付ける証言を行っており[13)]，そのことで作家は激しい批判を浴びた[14)]。当事者の5名の作家のなかでも特にベルゲルは，当初よりシュラットナーに対して激しい非難を繰り返しており，2012 年に同郷の作家ヴィリアム・トートク（William Totok）が 1959 年の裁判記録やセクリタテアの活動記録を綿密に検証し，5 名の作家たちの有罪につながった証言はシュラットナーのみならず，複数の人物によってなされ，特に当時ティミショアラで活動していた複数のド

12）一例を挙げると，Ernest Wichner: Dichtung und Verrat. Das Gleiche ist nicht Dasselbe. In: *Der Tagesspiegel*. 7.3.2011.

13）Protokolle der Zeugenaussagen. In: Peter Motzan / Stefan Sienerth (Hrsg.): *Worte als Gefahr und Gefährdung. Fünf deutsche Schriftsteller vor Gericht (15. September 1959 – Kronstadt / Rumänien). Zusammenhänge und Hintergründe. Selbstzeugnisse und Dokumente*, unter Mitwirkung von Andreas Heuberger, München (Südostdeutsches Kulturwerk) 1993, S. 320-325.

14)一例として，Windisch-Middendorf, Renate: „Verraten, vergessen und wieder verraten“ Literatur und Wirklichkeit – Moralische Schuld und dichterische Selbstinszenierung. Notwendige Informationen zu Eginald Schlattlers Roman „Rote Handschuhe“. In: *Südostdeutsche Vierteljahresblätter. Jg.51. H.1*, 2002, S. 29-35 が挙げられる。

イツ語学文学研究者や文化人から成る専門家委員会によるベルゲルの作品分析とその報告書が大きく影響したこと等を明らかにした[15]後も，シュラットナーに対する批判的姿勢は変わっていない。

記念論集でやや違和感を覚えたのは，本来，第1巻に収められるべきであろうシュラットナーの『赤い手袋』に関する論文[16]が，第2巻の „Kontrapunktik von Identität und Hybridität“の章に挿入されていることである。著者のマルツィーニは，1959年の裁判を念頭に，被害者と加害者を問う道徳的問題は，文学研究者をも含めた第三者にとって未解決のままにしておかざるをえない，と慎重な姿勢を示し，研究者が問うべき問題は，「被害者の役割，加害者の役割が，文学的にどのように提示されているか」[17]であると述べている。そのうえで，主人公が次第にセクリタテアの被害者からセクリタテアとともに加害行為に及ぶ過程を略述し，主人公の精神的不安定や，本来の加害者であるセクリタテアのエージェントが加害者というよりは主人公の共感を得ている人物であること等が指摘されている[18]。しかし全体として，ごく表面的な論述にとどまり，シュラットナーの長大な小説世界を綿密に理解しているとは思えない。

シュラットナーは，現在のルーマニア・ドイツ語文学における有数のベストセラー作家であるにも関わらず，この扱いは正当とは言えないであろう。ベルゲルはグツ教授と非常に親しく，記念論集第1巻には心の籠った祝辞やエッセイ集を寄せており[19]，編集委員会がベルゲルに配慮したとも考えられる。ルーマニア・ドイツ語文学，そしてこの分野に関する研究は現在，社会主義独裁時代の負の遺産に苦しんでもいるのである。

2巻の記念論集を繙きつつ，ルーマニアのドイツ語学文学研究が歩んできたこの四半世紀を振り返るとき，かの地の研究者たちが Auslandsgermanistik の成果として発信したものが，どれほどドイツ語学文学研究に多様性を与え，新たな地平を拓いたかに

15) トートクはベルゲルがシュラットナーに対して一貫してとってきた攻撃的言動についても批判的かつ詳細に言及している。William Totok, Empathie für alle Opfer. Eginald Schlattner, ein Leben in Zeiten diktatorischer Herrschaft. In: *Halbjahresschrift für südosteuropäische Geschichte, Literatur und Politik. Jg. 24 H. 1-2*, 2012, S. 181-198.

16) Elisabeth Martschini: Wie Opfer gemacht wurden. Eginald Schlattners Roman *Rote Hanschuhe*. (Bd.2, S. 508-528.)

17) Martschini, a.a.O., S. 526.

18) Martschini, a.a.O., S. 526-527.

19) Hans Bergel: Der Enthusiasmus des Germanisten. Prof. Dr. George Guţu 70 Jahre alt. (Bd.1, S. 17-18.) sowie derselbe: Römische Momente. Von Pinien, Fresken und Palazzi. Ein Entwurf. (Bd. 1, S. 38-56.)

思いを致さざるを得ない。その過程において，ルーマニアの社会は必ずしも平穏ではなく，財政的にも厳しい状況が続いている。過去の重荷と闘いつつ，未来へと希望をつなげ，学術的成果を発信し続けることは並大抵のことではない。この活動を牽引し尽力してきたグツ教授の情熱に，敬意と感謝を捧げたい。